

漱石のヘリオトロープ

Junko Higasa 2014.4.14

ロンドン留学から帰った漱石は、パンとジャムと紅茶を好み、彼の地で触れた文学・美術はもとより、世間で流行した西洋物をいち早く作品に取り入れた。煙草の銘柄もその一例であるが、その代表的なものといえばインフルエンザとヘリオトロープだろう。流感の方はともかく、香水の方は語学に通じる進歩的女性を表現するのに格好のアイテムであった。

さてそのヘリオトロープ(Heliotrope)であるが、語源はギリシャ語で「helios(太陽)」(ギリシャ神話：太陽神ヘリオスの馬車)＋「trope(向く)」＝「太陽に向く」という意味を持つ。その香草を香水にしたのがフランスのロジェ・ガレ社(Roger & Gallet)で、1892(明治 25)年に「ヘリオトロープ ブラン Héliotrope Blanc」という名で発売し、多くの貴族に愛用された。それが日本で初めて輸入された香水なのである。この甘美な香水の名前を分解するとHéliotrope(薄紫) Blanc(白)ということになるが、実際にヘリオトロープの花には濃淡の紫系と白があり、紫の方が香りが強いと云われる。そしてその香草は「恋草」とも「神草」ともいわれる。それを応用したのが『虞美人草』と『三四郎』なのである。

『虞美人草』の藤尾は強い香りを放ちながら紫の花を開く「恋草」である。対して『三四郎』の美禰子は教会に通う迷える羊、すなわち白い「神草」である。漱石はこの香草の色を見事に使い分けた。